ツール・ド・フランスで使われた自転車（１９３４年）

自転車競技の一つである競輪は競技場の中で行いますが、ロードレースは私たちが毎日利用している道路を使って行います。そのロードレースの中でも最高峰が毎年７月にフランスで行われているツール・ド・フランスです。１日２００キロ前後を約３週間に亘って走り、総合タイムで優勝を決めます。使うコースは毎年替わり、平坦な道もあれば標高２０００メートルを超える山を上っては下ったりするときもあります。

山岳コースを上り下りするためには強靭な体力脚力が必要ですが、自転車にはギヤチェンジ機構が装着されているので、それをいかに利用するかも勝負のポイントになります。

１９０３年に始まったレースですが、ギヤチェンジ機構の装着が認められたのは１９３７年からでした。スイスの工房バーガーで造られ、１９３４年のレースで使われたこの自転車には片側に３枚、反対側に１枚合計４枚のギヤが付いていますが、チェンジ機構は付いていません。３枚のギヤの交換は車輪の中心にあるナットを緩めて車輪を前後に移動させてチェーンを架け替えます。反対側のギヤは車輪を左右に入れ変えて使います。

当時は舗装されていない山道で、１日に３００キロ走るときもあり、選手たちにとっては今以上に過酷なレースでした。そういうレースが行われていた１９２６年と翌年に、一人でフランスに渡りツール・ド・フランスに出場した最初の日本人が川室競でした。残念ながら２回とも初日で棄権しましたが、果敢に挑戦した姿は称賛に値するものです。

川室競（かわむろ きそう）（１８９２年～１９７３年）

父親が国際航路の船長という環境の中で育ったので、海外の知識も高かったと　思われる。２６歳のとき技術者としてフランスに渡りアマチュアの自転車レースにも度々出場した。その後プロ選手となり、１９２６年と２７年のツール・ド・フランスに最初の日本人として出場した。

後輪のアップ写真

１９２６年のツール・ド・フランスに川室競が日本人として初めて参加したときのスタート前のようす（中央)。左足に包帯を巻いての出場のため初日で棄権してしまった

１９２７年のツール・ド・フランス初日のレース。舗装されていない道路でパンクも頻繁に起こったため、中央の選手の右肩のようにタイヤを巻いて走る選手も多かった

自転車文化センター　　谷田貝一男